大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

ワルシャワ・ゲットーにおける「闘い」(2)：イツハク・カツェネルソンのイディッシュ語作品をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 細見, 和之 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002840

人間科学：大阪府立大学紀要 6 (2010), 137-171 (2011年2月刊行)

ワルシャワ・ゲットーにおける「闘い」（２）

――イツハク・カツェネルソンのイディッシュ語作品をめぐって――

細見 和之*

はじめに

別稿で私は、イツハク・カツェネルソン（1886－19444）のワルシャワ・ゲットーにおける表現者としての「闘い」を、イディッシュ語の大作「ラジンのレベの歌」にそくして考察した[1]。「ラジンのレベの歌」は、ワルシャワ・ゲットーの住民の絶滅収容所トレブリンカへの「移送」が開始される直前に書き起こされ、トレブリンカへの「移送」の開始によって中断され、「移送」がいったん停止されたのちにふたたび書き継がれた作品だった。その意味である種の特権的な作品と呼ぶことができる。しかも、カツェネルソンはまさしくそのトレブリンカへの「移送」によって、妻ハナとふたりの息子ベン - ツィオンとベンヤミンを奪われたのである。ゲットーの運動グループ、とりわけドロール[2]の若いメンバーと親しく接していたカツェネルソンは、その「移送」がなにを意味しているか、熟知していた。

これにたいして、本稿ではその「ラジンのレベの歌」以前、1941 年 4 月から 1942 年 7 月までのあいだにイディッシュ語で書かれたゲットー作品を取り上げてみたい。「ラジンのレベの歌」と較べると比較的小品が多くなるが、これらの作品はその分バラエティに富んでいる。ゲットーで日常化していた飢えや寒さを歌った作品、ゲットーで死んでいった友人を悼んだ作品、ゲットーのユダヤ人指導層にたいする異議申し立てをふくんだ作品、ドイツ人にたいする怒りをぶつけた作品、彼の考える「ユダヤ的英雄」を讃えた作品、またゲットーの恐るべきひとこまを定着させた作品、等々である。

---

* 大阪府立大学人間社会学部人間科学科

[1] 細見和之「ワルシャワ・ゲットーにおける『闘い』――イツハク・カツェネルソンの大作「ラジンのレベの歌」をめぐって――」、人間科学：大阪府立大学紀要、第 5 号、大阪府立大学人間社会学部人間科学科／大阪府立大学大学院人間社会学研究科人間科学専攻、2010 年 3 月、63-89 頁。

[2] 「ドロール」はイツハク・ツケルマン、ツヴィア・ルベトキンらを中心とした社会主義シオニストの青年組織のひとつ。ワルシャワ・ゲットーでカツェネルソンは、彼らの地下ギムナジウムの教育・文化活動から 1943 年 4 月の武装蜂起にいたるまで、行をともにする。なおヘブライ語「ドロール」の原義は「自由」。

しかもこれらの作品の多くは、ドロールが地下出版の形で発行していた新聞「ドロール」に掲載されたり、また、カツェネルソンが機会あるごとに友人たちのまえで朗読したりすることによって、ゲットーの住民のあいだで当時から知られていた。その結果、ユダヤ人指導層を批判した作品を掲載したことによって、ドロールの中心メンバーのひとりだったイツハク・ツケルマンはユダヤ人の指導層から脅迫されることにもなる。つまり、これらの作品は、たんにワルシャワ・ゲットーのただなかで書かれたのみならず、その現実にさまざまな意味で介入する力を発揮したものなのである。

さて、ここで取り上げるのは具体的に以下の作品である。作品の末尾に付されている日付とともにまず一覧の形で掲げてみる（⑤、⑦、⑧の作品に日付はなく、間接的な証拠から推測されている執筆時期である）[3]。

①「ヘルシェレの死の記録」	1941 年 4 月 1 日
②「舞踏会」	1941 年 5 月 1 日
③「空腹の歌」	1941 年 5 月 29 日
④「寒さの歌」	1942 年 2 月 10 日
⑤「神よ、怒りを注いで下さい」	（1942 年 2 月－3 月）
⑥「災いあれ」	（1942 年）5 月 31 日
⑦「シュロモー・ジェルホプスキの歌」	（1942 年 6 月）
⑧「そのユダヤ人は笑った」	（1942 年 6 月終わり - 7 月 20 日）

このように、1941 年 4 月 1 日から 1942 年 7 月 20 日あたりまでのあいだに書かれた作品であり、⑧「そのユダヤ人は笑った」の執筆時期は「ラジンのレベの歌」の開始と前後していた可能性があるが、いずれにしろ、トレブリンカへの「移送」がはじまる直前までにワルシャワ・ゲットーで綴られた、貴重なイディッシュ語作品である。

途中、③と④のあいだに 8 ヶ月以上の空白があるが、この時期、カツェネルソン

[3] 以下、これらのカツェネルソンの作品は、シェイントゥフの編集したつぎのカツェネルソンのワルシャワ・ゲットーでの作品集成にもとづく。KATZENELSON , YITSHAK, *YIDIShE GETO-KSOIV VARShE 1940-1943*, Ghetto Fighter's House and Hakibbutz Hameuchad Publishing House 1984.これらの作品についてはとくにページ数を記さずにおく。

は大きな戯曲をふたつ仕上げていた。ひとつは聖書のヨブ記にもとづく「ヨブ」と題された3幕ものの戯曲である。カツェネルソンは、シェイントゥフによる集成版で110ページにわたるこの大作の執筆に1941年の前半に長期にわたって携わっていたと推定されている。そして、1941年夏にカツェネルソンがその第1幕と第2幕を2 時間かけて朗読したのを聞いたという証言もある。もうひとつは「ぼくを通りに出して！」と題された、やはり3幕ものの戯曲であって、こちらは1941年8月24日から10月21日のあいだに仕上げられたと推測されている。ただし、残念なことにこの戯曲はすべて散逸してしまっている。カツェネルソンはこの戯曲を孤児院の子どもたちのために書き上げ、彼らと実際に演じていたようなのである[4]。

それにしてもワルシャワ・ゲットーのただなかで書かれた新たなヨブ記と、孤児院の子どもたちと演じられた戯曲、このふたつの作品の重要さは否定すべくもないが、カツェネルソンの戯曲については稿をあらためて考えることにして、本稿ではうえの8つの詩に焦点を置きたい。

1．ユダヤ人指導層への批判

カツェネルソンがこれらの作品を書いた時期のワルシャワ・ゲットーの状況をまず最低限、確認しておく必要があるだろう。ワルシャワ・ゲットーの壁が打ち立てられたのは1940年11月6日だが、1941年1月から1942年6月まで、ワルシャワ・ゲットーの人口はつぎのように推移している[5]。

1941年1月	380,740	1942年2月	368,902
3月	445,000	5月	400,000

[4] それについて、カツェネルソン自身『滅ぼされたユダヤの民の歌』の第11の歌で、妻ハナに問いかける形でこう記している。

覚えているかい、トファルダ通りの家、小ゲットーの中にあった家、あの孤児院を？
50人の子どもたちのことを？　みんな健やかにあれ！　私は彼らのために芝居を書いたのだった
覚えているかい、『ぼくを通りに出して！』の子どもたちを？　彼らは演じながら成長した、すっかり大きくなっていったのだ
彼らと一緒に私の作品も成長した…私が籠めた心と感情以上のものを、彼らは作品に注いでくれた…
（飛鳥井雅友・細見和之訳『滅ぼされたユダヤの民の歌』みすず書房、1999年、65頁）

[5] この数字は以下による――Gutman, Yisrael, *The Jews of Warsaw 1939-1943*, Indiana University Press 1989, p. 63.

5 月	442,337	7 月	335,514
6 月	439,309		
7 月	431,874		
8 月	420,116		
9 月	404,300		

1940 年 11 月、ゲットー設立の時点でユダヤ人の人口は約 40 万人だった。それが 1941 年 3 月には 445,000 人に膨れあがって、記録上、この時期が最大の過密状態にあったことになる[6]。これはこの年の 1 月末から 3 月にかけて、ワルシャワ地区西部のユダヤ人 5 万人あまりが、ゲットーへ強制移住させられたからである。1942 年 5 月にふたたび人口が急増しているのは、今度はワルシャワ地区東部のユダヤ人がワルシャワ・ゲットーに強制移住させられたからである。そして、1942 年 7 月にはトレブリンカへの「移送」がはじまる。いずれにしろ、これらの作品をカツェネルソンが書いていたとき、ワルシャワ・ゲットーはもっとも過密な人口を抱えていたのである。

そして、そのゲットーにおいては、トレブリンカへの「移送」がはじまる以前に、人々はきわめて高い比率で死亡していた。ふたたび、この時期のワルシャワ・ゲットーにおける死者の数の推移を確認しておこう[7]。

1941 年 1 月	898	1942 年 1 月	5,123
2 月	1,023	2 月	4,618
3 月	1,608	3 月	4,951
4 月	2,061	4 月	4,432
5 月	3,821	5 月	3,636
6 月	4,290		
7 月	5,550		
8 月	5,560		
9 月	4,545		
10 月	4,716		
11 月	4,801		
12 月	4,366		

1941 年 6 月からは毎月 4000 人から 5000 人が死亡している。ナチの突発的な暴力による死者も存在していたにしろ、これらの死者の大半は飢餓とチフスなどの伝染

---

[6] ただし、以下の最新の研究では、1941 年 3 月のピーク時の人口を約 460,000 人としている――Engelking, Barbara & Leociak, Jacek, *The Warsaw Ghetto. A Guide to the Perished City*, trans. by Emma Harris, Yale University Press 2009, p. 41.

[7] Gutman, *op. cit.*, p. 64.

病による死者だと言われる。伝染病による死をふくめて、このきわめて高い死亡率には悪化する食料事情が如実に反映している。トレブリンカへの「移送」に先立つこの時期に、あわせて 10 万人近くが死亡したとされる。月 5000 人の死が 1 年続けばそれですでに 6 万である。これを指してイスラエル・グートマンは「間接的な絶滅」と呼んでいる[8]。

この夥しい餓死者のなかには、カツェネルソンにとってかけがえのない友人のひとりであった詩人ヘルシェルもふくまれていた。ダニエレヴィッチ・ヘルシェレは 1882 年の生まれで、カツェネルソンより 4 歳年長だったが、戦争の勃発以前に 12 冊以上にも達する詩集や歌集を出版し、とりわけ民衆的な作風で知られていた。ヘルシェレはゲットーでも相変わらず膨大な作品を書いていたのだが、その彼が餓死してしまうのである。カツェネルソンはヘルシェレを救えなかった痛苦の思いを一篇の詩に託した。それが「ヘルシェレの死の記録」という詩である。以下は 1 連 4 行を 16 連重ねた作品の出だしである（[　　]内は編者シェイントゥフによってオリジナル草稿から新たに読み取られた箇所、もしくは判読不能とされている箇所。以下同様。また原文では各連の 2 行と 4 行で脚韻が踏まれている）。

あの[週]の最初の日、ヘルシェレ！
私はうれしかった――
[「]きみは哀れな勘[違い]をしているよ
私は大げさに言ったんだ[……」]

すると二日後のことだ
私はメモ書きを受け取った
「[私]は病気になって
小さな折りたたみ式ベッドに横たわっている、

医者たちが言うには
とにかく食べなさい、食べなさい……」
私はあのメモ書きのことを
一度として忘れたことはなかった！

冒頭にシェイントゥフによってオリジナル草稿から補筆されている「週」とは、ヘルシェレが餓死し、その葬儀が行なわれるまでの最後の 1 週間のことである。その最初の日、おそらくヘルシェレがひとを介して、カツェネルソンに事態が危機的

[8] *Ibid.*

であることを伝えたのだ。カツェネルソンは大急ぎでヘルシェレの見舞いに出かけた。ヘルシェレはそのときにはカツェネルソンを安心させるような元気な顔を見せていたのだろう。しかし、すぐ 2 日後には「メモ書き」が届く。本人の口から聞いた様子とその「メモ書き」のあいだの落差。「私はあのメモ書きのことを／一度として忘れたことはなかった！」の 2 行には、事態の深刻さを見抜けなかった自分にたいする、まるで自己処罰のような痛切な思いがこめられているだろう。

さらに、カツェネルソンはこの作品で、そのヘルシェレの「メモ書き」を引用する形で、ワルシャワ・ゲットーのユダヤ人上層部にたいする批判を綴る。

「もしもアプルボイムが彼の食堂から
好意的にも、私に
もう何日か、いくらか粥を
まわしてくれるなら……」

しかし、アプルボイムには
[そうすることが]できない
責任者はほかのことに
気を取られているのだ……

「あるいはギテルマン――きみは知っているだろう
[ジョイント]の彼だ……彼のもとへ[行ってくれ]
そして[私が死にそうだと]伝えてくれ
行って、彼と[相談して]くれ……」

ギテルマン……一日中あそこで待っても
何一つ得られはしない……
だから私は行かなかった！

それから[2 日後]
ワル[シャワは雷鳴のように伝えた]
あの詩人［ヘルシェレ］が
餓死して[しまった、と]。

ここに登場するアプルボイムは、『モメント』という雑誌に関わるジャーナリストであるとともに、レシュノ通り 14 番地で活動していた無料食堂の管理者だった。当時ワルシャワ・ゲットーでは多いときには 100 以上のさまざまな無料食堂が活動を展開していたが、レシュノ通り 14 番地のそれは、とくに「作家、ジャーナリスト、その他文学者のための食堂」と位置づけられていた[9]。ただし、このアプルボイムの

[9] Engelking, Barbara & Leociak, Jacek, *op. cit.*, p. 335.

名前はワルシャワ・ゲットーではさほど知られていず、私もシェイントゥフが索引に付している短い解説だけが手がかりである。そのシェイントゥフも、アプルボイムは「1942 年にゲットーで殺された」と書いてはいても、生年も、さらにはファーストネームさえも記していない[10]。

一方、ギテルマンはゲットーにおける社会活動の中心人物のひとりだった。うえの作品に登場する「ジョイント」は 1914 年に設立された「アメリカ・ユダヤ人合同分配委員会」の通称で、第一次世界大戦当時から、この委員会をつうじてアメリカ合衆国のユダヤ人組織からの支援が世界的な規模で展開されており、それがワルシャワ・ゲットーでの社会福祉活動の財政基盤ともなっていた。ギテルマンはそのジョイントのポーランドにおける元代表であり、この時点ではワルシャワにおける 4 人の委員のひとりだった。彼はまた、歴史家リンゲルブルムの資料収集活動「オネグ・シャバト」に関わるとともに、非合法組織イディッシュ文化協会（YIKOR）の活動にも携わり、ユダヤ人戦闘組織（ZOB）が成立してからは武器獲得のための資金援助も行なった。したがって、ギテルマンとカツェネルソンは親しい関係にもあったはずだが、ここではカツェネルソンは、そのギテルマンにたいしてすら吐き棄てるかのような口調で書いている。

とはいえ、この苦い口調にこめられているものはあくまで状況にたいする強い憤りである、と理解するのが通常の受けとめかもしれない。しかし、少なくともゲットーのユダヤ人組織はそのようには受けとめなかったようだ。この詩がゴルドベルグという偽名で非合法新聞「ドロール」に掲載されたあと、ドロールの指導者のひとりで「ドロール」の編集を担当していたイツハク・ツケルマンは、ゲットーにおける社会活動を担っていた「ユダヤ人相互扶助組織」（ZTOS）に呼びだされ、作者の本名を明かすように、「ゲシュタポ流儀の査問」を受けたという[11]。ツケルマンによると、組織の側は「ヘルシェレの死の記録」という作品を、とりわけグスタフ・ヴィエリコフスキへの批判として、ツケルマンを執拗に査問したのだった。ヴィエリコフスキはユダヤ人評議会のメンバーであり、とくにその社会福祉部門の代表を務めていた。カツェネルソンのこの作品に直接ヴィエリコフスキの名前は登場しないが、アプルボイムの名前とともに記されている「責任者」がヴィエリコフスキを

---

[10] KATZENELSON, *op. cit.*, p. 748.

[11] Zuckerman, Yitzhak, *A Surplus of Memory. Chronicle of the Warsaw Ghetto Uprising*, translated and edited by Barbara Harshav, University of California Press 1993, p. 110.

指していると見なされたのだろう。これは、当時ユダヤ人上層部が自分たちにたいする批判にかなり神経を尖らせていたことを示すエピソードでもあるだろう。ただし、ツケルマンの抗議によって、逆にヴィエリコフスキに警告が発せられる結果にいたったという[12]。

「ヘルシェレの死の記録」の後半では、皮肉なことに穏やかに晴れた日の葬儀の模様が描かれている。以下はその後半からである。

葬儀は
3 日後に行なわれた――
彼は幸運の持ち主で、
葬儀はよい天気にも恵まれた……

出てこい、ヘルシェレ、ヘルシェレ
棺桶のなかから出てこい、
とってもよい天気だぞ
断食するにはもってこいだ……

彼はもう出てこない
ふたたび姿を見せることはない
けれども彼は残したのだ、
千もの歌を。

〔中略〕

人々は[こぼ]した
開いた祈祷書のうえに、
千の歌に由来する
澄んだ真珠の[数々を]。

彼の小柄な[妹は]泣かない
彼女は[呆然と]立ち尽くしている――
［ヘルシェレよ］、君はわれわれを
誰にゆだねたのだ？

[千の歌]
[ひとりの]妻と二人の子ども――
そして墓場のうえには
昼の光、穏やかな昼の光。

ツケルマンの回想録に付された注によると、ヘルシェルがゲットーで書いていた

[12] *Ibid*.

膨大な作品は残された妻の手によってドロールのコミューンのあったジェルナ通り34番地に運ばれていたが、わずかに2篇が「ドロール」の紙面に掲載されたのみで、他はすべて散逸してしまったという[13]。

この作品と同様に、ゲットーでのユダヤ人の社会援助が決定的に機能不全に陥っている悲劇的な事態を描いたのが、「舞踏会」である。ゲットーの貧しい住民層を救済するために、あるアパートで慈善事業として住宅委員会によって「舞踏会」が催された。そこで集められた参加費などをその当のアパートの貧困層に提供するという趣旨である。しかし、舞踏会がアパートの上層階で開催されているその夜、地下の一室では飢餓状態にあった家族の成員3人がつぎつぎと死んでゆく。ゲットーにおける悲劇的なこの事態を描いた4つのパートからなる「舞踏会」の冒頭はこう書き起こされている。

地下の階は暗い
別の階は明るい、
地下ではみんなうれしく思う――
あそこでは昼間のように灯りがともっている！

地下では腹ペコ、
人びとはホールを覗き込む――
地下ではみんなうれしく思う
あの上の階では舞踏会……

皿ががちゃがちゃと音をたて、
客たちはくぐもった声を発する。
地下ではみんなうれしく思う。
あそこでは飲んで食べての大騒ぎ。

あそこではみんな食べ、みんな飲み
誰もが舌鼓を打っている。
地下室ではみんなうれしく思う
われわれは幸いだ、幸いだ！

華やかで明るい舞踏会と地下の孤独な暗闇の対置。それでいて、華やかな舞踏会がゲットーで現に催されていることは「地下室」でも励ましのように受け取られている。しかし、その舞踏会でシャンペンのコルク栓が抜かれる音を聞きながら、まず父親が死んでゆく。以下は2のパートから。

---

[13] Zuckerman, *op. cit*., pp. 109-110.

ああ、お父さん、死なないで、
上からは光が差していますよ。
ほら、聞いて、聞いて、みんな壜を開けて
飲んでいますよ、あそこではワインを。

あれはピストルの音ではありません……
コルク栓が壜からはじけ飛ぶ音
聞いて、聞いて、杯を掲げては発せられている
乾杯の声を。

「あれはピストルの音ではありません」という一節には、ゲットーで日常化していた射撃の音と、貧しい住民には縁遠いコルク栓の音が交錯して、とても印象的であるだろう。彼らの命を生き延びさせるよりは削りとるものであるかぎりは、父親が瀕死の状態で耳にしているその音はやはり「ピストルの音」にも等しいのだ。舞踏会ではピアノ伴奏によるダンスがはじまり、やがてはその物音も静まってゆく。とはいえ、舞踏会は終わったのではない。ひとびとは今度はトランプ遊びに興じているのだ！　母親はそのトランプ遊びの声に静かに耳を傾けながら死んでゆく。つぎは 3 のパートから。

ある人は飢えて死んでゆく、
別の人は死なない、そのとおりね。
でも、トランプのゲームでは
全員が勝つことはできないのよ……

負けるのは愚かではないし、
勝つのが手柄なわけじゃない――
でもあの人たちがあそこでゲームをしてるのは自分たちのためじゃない、
あの人たちは私たちのためにゲームをしているんだよ！

ああ、お母さん、しっかりして、
ああ、お母さん、死なないで！
子どもよ、目をお開き――
あのひとたちはあそこでゲームをしてる、3 時間半も！

死の間際の母親には、ことの次第は明瞭である。「トランプのゲームでは／全員が勝つことはできない」。ゲットーの現実とトランプのゲームという非現実が奇妙に重なる。ゲットーのなかで生き延びることがなにを意味しているかにも、餓死してゆく彼女は透徹したまなざしを注いでいるのだ。そして、4 のパートでは翌朝の光景が描かれる。白々とした光のなか、住宅委員会の委員長が地下室へと降りていったとき、残された最後の子どももすでに死に絶えていた。

太陽がのぼった
それからもうしばらく時間がたった――
地下は影に覆われている、
太陽は地下を覗き込んだりしない――

委員会は太陽よりも
10 倍も立派である！
委員会は知っているのだから、
何をするべきかを……

委員長がただ一人
地下へと降りてゆく、見よ！
10 ドル札が丸ごと与えられる、
何とありがたいこと……けれど、あまりに遅すぎた！

父は死に絶えていた、
母ももう死んでいた、
子どもはもう待ってはいなかった
一切れのパンを……

ここでの「委員長」の姿には、ゲットーの慈善事業が抱えていた無力な矛盾撞着が凝縮されている。太陽さえ見放す地下の一室に委員長は 10 ドル札をたずさえて赴くのだが、「あまりに遅すぎた」のだ。イツハク・ツケルマンはカツェネルソンのこの作品に触れて、芸術的価値はともかく、これがゲットーのアパートにおける裕福な層と貧困な層の生活を映し出した貴重なドキュメントとしての意味をそなえていることを強調している[14]。逆に言えば、ツケルマンはこの作品の芸術的価値はさして高くないと考えていたようだ。しかし、一篇の詩としてみた場合、カツェネルソンがこの作品をさらに舞踏会の翌日の夜の光景で結んでいるところが重要ではないだろうか。以下はこの作品の末尾である。

そしてふたたび夜の帳が
空高くから降りてきたとき――
地下は静かだった
上の階もまた静かだった。

窓から明るい灯りが
漏れてはいなかった
人々はごちそうを食べていなかった
ワインを飲んでもいなかった。

---

[14] *Ibid*., p. 124.

そこでは誰もダンスをしていなかった、
トランプ遊びもしていなかった、
それは誰のためにもならなかった
何のためにもならなかった。

地下では誰もうれしく思っていない、
喜びもなければ、困窮もない。
思い煩う者もいなければ、待つ者もいない――
地下を支配しているのは死のみだった。

翌朝委員長が地下へ降りてゆくと家族 3 人ともが死んでいた、という結末で終わらせるか、その夜の光景まで書き込むか。後者のほうが作品に漂う非常なまでの虚無感はいっそう濃くなると言えるだろう。シェイントゥフによると、この作品はゲットーの日常のなかの悲劇を印象深く定着させた作品として当時ゲットーでよく知られていたという[15]。ツケルマンが回想録のなかでこの作品に触れていることを紹介したが、それもそのことと関わっているかもしれない。ただし、この作品が「ドロール」などの紙面に掲載されたという記録はない。その分、「ヘルシェレの死の記録」が引き起こしたような、ユダヤ人上層部からの弾圧をまねくことはなかったようだが、おそらくは私的な朗読の機会などをつうじてゲットーの内部で秘かに浸透していった作品なのだろう。

２．連作「家族の歌」の試み

カツェネルソンはこれにつづく「空腹の歌」と「寒さの歌」において、ヘルシェレや作品「舞踏会」で描かれた餓死してゆく一家と同様の状態に置かれている、自分自身の家族のことを主題としている。これらの作品はひとつの連作としてゲットーでは「家族の歌」として知られていたという[16]。やはりカツェネルソンはこれらの作品をドロールのメンバーたちのまえで朗読していたのだった。これを『滅ぼされたユダヤの民の歌』の生成史という観点で捉えるならば、あの大作に家族の記憶が塗りこめられてゆく、トレブリンカへの「移送」に先立つその端緒と位置づけることができるだろう。

「空腹の歌」は、「通りへ出ておいで」と「空腹の歌」という二つのパートに分か

---

[15] KATZENELSON, *op. cit.*, p. 484.
[16] *Ibid.*, p. 619.

れていて、この2作をあわせた総タイトルがふたたび「空腹の歌」となっている。そして、さきに記したように、後半の「空腹の歌」の末尾には[1941年]5月29日の日付が書き込まれているが、前半の「通りへ出ておいで」にはその前日、1941年5月28日の日付が付されている。したがって、連続して書かれたことは疑いがないのだが、じつはこの二つの作品はかなり性質を異にしている。さらに書かれていた作品があって散逸したか、途中で放棄されたかのような印象があるのだ。「通りへ出ておいで」は、つぎのように妻ハナへの呼びかけから始まっている。

> 出ておいで、愛しいお前、通りへ、死ぬために出ておいで
> 通りへ、
> 硬い歩道へ、刺々しい歩道へ――
> 私たちの子どもたち、青い顔の子どもたちを連れておいで。
>
> 連れておいで、いちばん年かさのも、まんなかのも
> 3番目の子どもも――こいつはまだとっても幼いが、
> 彼だって大人のユダヤ人のように
> 腹をすかして死んでみせることができるだろう。

このように「通りへ出ておいで」という一見優しい妻への呼びかけは、一家で通りで餓死してやろうという、一種開きなおったような誘いなのである。実際、さきに確認したとおり、この時期、もっとも過密状態にあったゲットーの通りでは、つぎつぎとひとびとが倒れ、死んでいた。リンゲルブルムの『ワルシャワ・ゲットー』には1941年5月20日の日付でこう書かれている。

> 5月中旬には、飢えとその結果の大量死が最大の問題だった。このごろでは人びとは1日に150人の割で死んでいく（5月15日現在までで1,700人）。しかも死亡率は上昇中。[17]

トレブリンカへの「移送」に先立って、まるで死者たちの共同体がすでにゲットーの通りに現出していたかの光景――。家のなかでひっそりと死ぬよりも、瀕死の人間やすでに死亡した者たちで溢れた通りで死に絶えるほうが好ましいかの状態。すくなくとも通りでならひとは孤独ではない。以下は「通りへ出ておいで」の後半である。

> 出ておいで！　さあ、家から出ておいで――

[17] エマニュエル・リンゲルブルム『ワルシャワ・ゲットー』大島かおり訳、みすず書房、1982年、149頁。

空っぽの家から出ておいで――私はひとりでいるのが恥ずかしい――
生者を墓場に横たえてはならないように、
飢えた者を家のなかでひっそりと死なせてならない。

通りでは恥ずかしがる必要はない、みんな出歩き
戸外は人で膨れあがり、塊になって、守られている、
その一帯全体が一緒に出歩いている、
そこでなら、群集のなかで、群集のなかで、死ぬことができる

私たちも、私たちも歩道に身を横たえよう、
いいや、私たちは身を横たえるのではない――私たちはぶっ倒れるのだ――
いや、いや、ぶっ倒れるのではない、身を横たえて、待つのだ、[待つのだ。]
それから死んでゆくのだ、みんなが死んでゆくように。

さあ、通りに出ておいで……

これにたいして、タイトル作品「空腹の歌」では、さきの「通りへ出ておいで」を受けながらも、一転してウーチでの「幸福」な思い出が綴られている。以下は「空腹の歌」の前半である。

家のなかは心地よい、パンの一切れさえあれば、
けれど納戸は開けっ放しで、パン屑さえも見当たらない――
出ておいで――食事の一つも並んでいない、空っぽのテーブルについて
家のなかで餓死なんかしないでおこう。

家のなかは心地よい……ウーチでのことをお前は覚えているかい？
私たちのダイニングには絵がいっぱい掛けられていて、
汚れ一つない真っ白なテーブルクロス……お前はやっぱり覚えているだろう？
ひとかたまりのパン……ご免よ、あの日々のことを思い出させて……

ウーチでの夕方のことを覚えているかい？　私たちのところに
友人たちがどっとやって来て、みんな狼みたいにお腹をすかせていた、
覚えているかい、バターを添えた、焼き菓子、チーズ、テーブルのまわりには友人たち
神のお恵みだ、友人たちよ、さあ、好きなだけ食べるがいい、神のお恵み！

ヒトラーによるポーランド急襲が開始されるまえ、ウーチに暮らしていたカツェネルソンは、詩人として、劇団の興行主として、また成功した学校の経営者として、裕福に暮らしていた。彼のまわりには、彼を慕って多くの友人が集っていた。ほんの数年前のことだが、ワルシャワ・ゲットーの現状からすれば、それはまるで天国のような光景だ。思い出してもせん無いことだと知っていて、妻のハナに詫びつつも、ふたたび彼はウーチの思い出に引き込まれてゆく。長男のツヴィすらまだ幼か

った時代、ツヴィも友人たちも貪欲に食欲を満たしていた。この作品は、冒頭に回帰する形で以下のように結ばれている。

家のなかは心地よい、そこに食べ物があるならば、
通りに出ておいで――ここでは空が全員の頭の上で、弓なりに広がっている、
空からは不意にマナが降ってくるかもしれない――
何としても、天井からマナが降ってきたりはしないのだから……

家のなかは心地よい、パンの一切れさえあれば――

「マナ」の話は、荒地を彷徨うイスラエルの民にたいして、主が空からのちに「マナ」と呼ばれることになるパンを降らせたという、出エジプト記の記述を踏まえている。ともあれ、こうして「空腹の歌」という作品は末尾で冒頭に回帰することによって一応の結構をそなえているのだが、ここではウーチの思い出が量的にも質的にも中心を占めていて、作品としてはいささかいびつな構成になっている。ひいては、「通りへ出ておいで」とあわせた連作としても、かなり中途半端な印象は否定できないだろう。さきに記したように、この作品にはさらに書き継がれた部分があって、それが失われたのかもしれない。しかし、あえてこの 2 篇のみで考えるならば、「通りへ出ておいで」の呼びかけがたしかに鮮烈ではあっても、どこかやはり観念的である、という弱さがあるのではないだろうか。その観念性が「空腹の歌」においてウーチの思い出のリアリティに逆襲されているようなところがあるのではないか。

いずれにしろ、約 8 ヶ月の期間をおいて 1942 年 2 月 10 日の日付が書き込まれたもう一つの連作「寒さの歌」においては、作品の緊迫度は遥かに増している。飢餓状態は相変わらず続いているうえに、今度は寒さがそれに決定的な追い討ちをかける。4 つのパートからなるこちらの連作では、もはや妻や家族への呼びかけは登場しない。以下は 1 のパートの全行である。

家のなかは寒い、ひどい寒さだ、
家のなかを駆けている、狼たちが、
窓のところには熊たちが居座って、
私も、妻も、子どもたちも、震えている
なすすべもなくて…
それでいて、[誰にも]それは見えない、聞こえない
泣くなよ、泣くなよ、
涙のやつがゆっくりと
えい、ちくしょう！
私たちの目のなかで凍りついてしまうから。

家のなかは寒い、私は恐れる
自分の家のなかなのに、恐怖が私に襲いかかる、
それで私は荒れた通りに出てみる
出くわすのは、もう凍りついた人間たちだ
まるで切り倒される樹木さながら
沈黙の恐怖で両腕を投げだし
叫び声を一つあげて
無用の者です、荒れすさんだ者ですと
君たちは挨拶しているのか、
そんなにこわばった姿で、私に挨拶しているのか？

ここではカツェネルソンは、もはや死ぬために通りへ出かけようなどと呼びかけたりはしない。家のなかの寒さと孤独に耐えかねて彼は思わず通りに出かけるのだ。しかし、通りで彼が見かけるのは 8 ヶ月前のひとで溢れかえった光景ではない。いや、ひとの姿が冬の最中においてさえも通りに途絶えるということはなかったかもしれない。しかし、それはかつて「塊になって、守られている」と歌われたような、逆説的な共同性を体現している群集ではない。「切り倒される樹木さながら」に「凍りついた人間たち」なのだ。

しかし、この連作においても「空腹の歌」と同様に、ウーチの記憶がこだましている。以下はこの作品の 2 のパートから。

家のなかは寒い、そして暗い
夜になって私は、
窓から、紙を、黒い紙を、静かに引きおろした
すると、空から月が私を見下ろしていた
冷たい輝きを、光の蒸気を、私に注いだ
そして無数の星々が
長い年月を飛び越えて
何年も前と同じように
もう一度、もう一度、
私にむかって瞬いた、まるで
幸せ一杯！　幸せ一杯！　とでも言うように
止めてくれ！　止めてくれ！　それはでたらめだ！
お前たちは嘘をついている！
お前たちはあれらの夜をもう一度私の眼前に浮かばせる—
止めてくれ！

けれども、星々はそ知らぬ顔、
私から金色の震える糸を奪い取りもせず
相変わらず、際限なくそれらすべてを
私に送り続けている—
星々よ、消え失せよ！

ここで「何年も前と同じように」「幸せ一杯！　幸せ一杯！」と記されているのは、やはりウーチの日々のことだろう。しかしこちらではもはや、「空腹の歌」におけるように幸福な記憶がそのままに綴られたりはしていない。そもそも「ウーチ」という固有名は消し去られ、それらの思い出は抽象的な星空としてのみ登場しているのである。つまり、ここでカツェネルソンはかつてのウーチでの「幸福」な記憶からはいく重にも隔てられている。しかもその記憶をかすかに明滅させている星々にたいして、最後に「消え失せよ！」という叫びが発せられるのだ。

そして、この作品の 3 と 4 のパートで描かれているのは、わずかの「石炭殻」をもとめて悪戦苦闘しては歯軋りしてきた自分の姿である。4 のパートの冒頭にはこう書かれている。

家のなかは寒い―
私はうずくまっていた、冬ごもりの穴にいる熊のように
着古した上着を着た年寄りのように
糸巻きの糸のように私はくるくる身を包みこんでいた
家のなかに石炭はなく…
家のなかは寒い
レシュノ通り 14 番地は
小さなバケツ 2 杯半の石炭殻を約束してくれたのだが、
石炭殻…
家のなかは寒い！
私は石炭殻の代金を支払った
けれどもまだ届かない…
そのうち春になるだろう、夏になるだろう―
そのときには、私は石炭殻などもう受け取らない…
そうだ、そうだ！
石炭殻が何になる？

この一節に登場する「レシュノ通り 14 番地」がまさしく「ヘルシェレの死の記録」に現われたアプルボイムやその「責任者」の統括する無料食堂であったことは重要だろう。「作家、ジャーナリスト、その他文学者のための食堂」であったレシュノ通り 14 番地は、同時に燃料供給、とりわけ石炭の配給に関わる事務所を兼ねていたのだ[18]。言うまでもなく、冬のゲットーで石炭は食料と同じく生死に関わる重要な日用品である。10 ヶ月前、餓死してゆく友人ヘルシェレになんの援助もできなか

[18] 以下のシェイントゥフによる索引での説明を参照――KATZENELSON, *op. cit.*, p. 752.

ったレシュノ通り 14 番地を相手に、いまはカツェネルソン自身が自分と家族のために駆けずり回らねばならないのである。同じ 4 のパートにはこんなリアリスティックな一節も書き込まれている。

家のなかは寒い—
レシュノ通りに出かけていって
支払いの済んだ石炭殻の
レシートを見せてやろう—
私はもう支払ったのだ、キャッシュで
現金で—
それなのに、私は石炭殻を
石炭殻をまだ受け取っていないのだ—
家のなかは寒い…
レシュノ通りにもう一度出かけてみよう
この 2 ヵ月のあいだに
10 回でも、20 回でも…
石炭殻までは
遠いのだ、遠いのだ

このように「家のなかは寒い」という 1 行を反復しながら、メモ書きのように作品を綴ること——。それは、ワルシャワ・ゲットーのような状況でおよそ詩を書くということの意味について、私たちに考えさせるところがあるだろう。実際、こんな状況で詩を書いていることほど不毛なことはないかもしれない。それこそ、このような詩を書いている時間がすこしでもあるのなら、すぐさまレシュノ通り 14 番地へ出かけてゆくべきだ、というのがまっとうな判断かもしれない。こんな作品を書いているあいだに「10 回でも、20 回でも」と言っているうちの 1 回ぐらいは果たせるのかもしれないのだから。しかし、カツェネルソンには分かっていたのだ、レシュノ通り 14 番地に出かけても実際にはなんの役にも立たないことが。そんなとき、ほかにいったいなにができるだろう。

石炭殻一つない寒い家のなかにいて、「家のなかは寒い」と書き続けること、そこには画家が暗鬱な自画像を繰り返し描くのと類似した衝動があるのではないだろうか。そして、カツェネルソンはそれを、同じく飢え、同じく寒さに打ちしおれている仲間のまえで朗読していたのだった。さらには、同一の複数の手書き原稿が存在することから、まわし読みされるようにカツェネルソンが複数の草稿を最初から

作成していた可能性を、シェイントゥフは指摘している[19]。寒い家のなかにいて、「家のなかは寒い」という作品を書き、朗読していたこと、またそれをゲットーの読者が同じく寒い家のなかで黙読していた可能性――。だからといって、ほんのわずかでも部屋が暖まるわけでもなければ、苦しい時間がまぎれるわけでもない（これらの詩を読むための物理的時間はごくわずかのものだ)。しかも、そこに書かれているのはまさしく現在の苦しみそのものなのである。要するに、それはなんの救いももたらさない。しかしだからこそ、逆説的にも、このような作品の果たしていた機能を、嘘偽りのない、究極のエンターテイメントとも呼べるのではないだろうか。

このような作品がワルシャワ・ゲットーのただなかで書かれ、読まれたこと、それは詩の、文学の、なにか根源的な機能に関わる事態であるに違いない。

３．民族の絶滅という予感のなかで

とはいえ、そのような究極のエンターテイメントをゲットーで書きつづけることは、カツェネルソンには不可能となる。すでに 1941 年 6 月 22 日、ドイツ軍がソ連に侵攻して独ソ戦が勃発していた。当初そのニュースは、快進撃を続けるドイツ軍が決定的な敗北に向かう転機、そして戦争を終結にもたらす転機として、ワルシャワ・ゲットーのユダヤ人たちにむしろ歓迎されていたようだ（事実、大枠としてその判断は間違ってはいなかった)。

しかし、独ソ戦の過程で展開されていった、ウクライナとリトアニアでのユダヤ人にたいする大量殺戮のニュースが届く。さらに 1941 年 12 月からヘウムノでガス・トラックによる大量殺戮が始まり、そのニュースが 1942 年 1 月の終わりから 2 月の初頭にかけて、ワルシャワに到達する[20]。さらに同年 3 月から 4 月にかけてルブリン・ゲットーのユダヤ人が大量殺戮されてしまい、そのニュースが 4 月の終わりには確実なものとしてワルシャワに届く。そしてその同じ 4 月 17 日から 18 日にかけての夜、ワルシャワ・ゲットーで 52 人のユダヤ人が一挙に殺戮されるという凄惨な出来事が起こる。これはワルシャワ・ゲットーでのナチによる集中的なテロルとし

---

[19] *Ibid*. p. 619.

[20] ただしイツハク・ツケルマンは自分がヘウムノの大量殺戮を知った時期をもうすこし早く 1942 年 1 月のはじめとしている。以下を参照――Zuckerman, *op. cit*., p. 156. またその際ツケルマンは、ヘウムノで死体を埋める大きな墓を掘らされたひとりのユダヤ人の証言を詳しく紹介している。

ては、それまでで最大規模のものだった[21]。

この一連の動きのなかで、ナチによる「民族殺戮」という目的意識的な行為が自分たちにたいして向けられていることが、ワルシャワのユダヤ人、とりわけ若い活動家たちのあいだで、次第に明瞭に意識されていった。カツェネルソンもまた、若い活動家たちと密接に結びついていた人間のひとりとして、この恐るべき認識の過程を、むしろ率先する形で彼らと共有していった。そして、「民族の絶滅」というこの途方もない暗黒のヴィジョンが明確な輪郭を取ってゆくなかで作られたのが、「神よ、怒りを注いでください……」と「災いあれ」という 2 篇の作品である。

「神よ、怒りを注いでください……」は、そのタイトルからして、ペサハ(過ぎ越しの祭)と関わると考えられている。この言葉は、ペサハでの祈りに登場する、イスラエルの民を苦しめた他民族にたいする報復を神に嘆願するものと同一だからである。その点はまた、日付の書き込まれていないこの作品が書かれた時期の特定にも関係している。具体的にはユダヤ暦 5702 年のペサハの前後、西歴では 1942 年 2 月から 3 月に書かれたと推測されている[22]。この歌からカツェネルソンの作品には、狭義の意味でのホロコーストのただなかからの証言、という決定的な次元がくわわることになる。以下は、17 連（1 連 4 行）からなるこの作品の冒頭である。

神よ、怒りを注いでください！
怒りを、あなたの怒りを、注いでください。
おお、どうかご覧ください
私たちがこの地上でどんな目にあったかを

見てください、おぞましい憎悪をもって
彼らが私たちから作りあげたものを――
通りには死者たち、
路上には――殺戮された者たち。

見てください、恥辱のうちにある私たちを
[深い悲しみ]のうちにある私たちを

---

[21] ハイム・A・カプランは 1942 年 4 月 18 日付でこう書いている。「ユダヤ暦 5702 年、イヤルの月第 1 日の安息日の前夜は、ゲットーの住人にとって忘れられない恐怖の夜となった。暗闇の中で、ナチスが大虐殺を実行したからである。夜が明け、ゲットーの至るところで門前に横たわる死体を見つけたとき、われわれは、惨事がどれほど大規模だったかを初めて知った」――『ワルシャワ・ゲットー日記』（下）、アブラハム・I・キャッチ編、松田直成訳、風行社、1994 年、130 頁。

[22] KATZENELSON, *op. cit.*, p. 625.

[見てください、見てください]盲目の壁が
[私たちを]取り囲みました。

「盲目の壁」という言葉にワルシャワ・ゲットー（ないしは各地のゲットー一般）の具体的な状況が反映しているにしろ、この部分はまだ一般的なポグロムにたいする嘆きの範囲に収まるかもしれない。しかし、この作品には当時のホロコーストの進展と対応した具体的な地名が登場する。以下はこの作品の 5 連目から 7 連目である。

ウクライナの大地は赤く染まっています、
リトアニアの大地も赤く染まっています――
彼らは私たちを死へと引きずっていったのです
まるで子牛を屠殺人に引き渡すように。

一度に 3 千人、
そして 4 千人、5 千人、さらに多く――
数えてください！　数えてください――一人たりとも
あなたから忘れられることのないように！……

彼らはベッドから引きずり出します、
赤ん坊なら揺りかごから――
――おお大地、冷たい胎よ！
――お前は一緒に横たわっているだろう。

さきに記したとおり、1941 年 6 月 22 日、ドイツ軍が独ソ不可侵条約を破って、ソ連に侵攻する。独ソ戦の勃発である。このとき、いわゆるバルバロッサ作戦計画にしたがって、ドイツの南部方面軍はウクライナ征服をめざし、9 月には主要都市キエフを陥落させ、41 年の末までにはウクライナの全土がドイツ軍の支配下に入る。そして、この過程でまず、1941 年 6 月 22 日から 8 月 1 日にかけて、西部ウクライナ・ユダヤ人の絶滅の最初の段階が進行してゆく。殺害方法は親衛隊行動部隊による射殺である。現在では、これが狭義のホロコーストの始まりと位置づけられている。この殺戮作戦はさらに東にむかって継続され、9 月 29 日から 30 日にかけては、36 時間のうちにキエフのユダヤ人 3 万 3771 人が射殺された。これらの一連の絶滅作戦によって、1942 年春までに、ウクライナ地方に暮らしていた 150 万人のユダヤ人のうちじつに 70 万人が殺害されたとされる[23]。カツェネルソンがうえの作品を綴

[23] ウォルター・ラカー編『ホロコースト大事典』望田幸男ほか訳、柏書房、2003 年、95-98 頁、参照。

っていたとき、まさしく「ウクライナの大地は赤く染まってい」たのだ。

一方、リトアニアのヴィルノでは、同じバルバロッサ作戦の一環として、ゲットーの設立に先立って、ユダヤ人の大量殺戮が行なわれた。やはり殺戮の方法は射殺であり、殺害場所としてはヴィルノの郊外、ポナリの森がよく知られている。リトアニアの首都であり 16 世紀からユダヤ人が居住していたヴィルノは、19 世紀から 20 世紀にかけて「東ヨーロッパのエルサレム」と呼ばれるほどに、東ヨーロッパにおけるユダヤ人文化の中心センターとなっていた。

ドイツ軍が 1941 年 6 月 24 日、ヴィルノを占領したとき、ヴィルノのユダヤ人共同体は 5 万 7000 人を数えていた。このヴィルノのユダヤ人共同体を中心にしたリトアニアのユダヤ人共同体こそ、ナチによる「最終解決」の最初のターゲットにされた共同体だった。1941 年 9 月 6 日にヴィルノ・ゲットーが設立された時点で、すでにユダヤ人人口の 3 分の 1 が死亡していたとされる。ヴィルノ・ゲットーでは、ユダヤ人の青年運動の指導者を中心にいち早く抵抗運動が組織されてゆき、1941 年の大晦日には、指導者のひとりアバ・コヴネルが青年運動の集会で「ユダヤ人よ！　羊のように殺されに行くな！」と題された声明書を読み上げ、リトアニアを襲っている事態がユダヤ人の「絶滅」を意味することを強く訴えた。コヴネルの声明はホロコーストという事態がユダヤ人の側で認識された画期となった[24]。

まさしく「リトアニアの大地も赤く染まってい」たのであり、殺戮の規模は、一度に千人単位に達していたのだ。

さらに、カツェネルソンの「神よ、怒りを注いでください……」には、ヘウムノの名前が登場する。クロード・ランズマン監督の映画『ショアー』第 1 部で焦点があてられている、あのヘウムノである。

耳を傾けてください、墓場の呻き声に
石灰を被せられた呻き声、
幼い子どもたちのすすり泣く声に
彼らは撃たれたが、即死はしなかったのです！

ヘウムノのガスのような、
静かで、巧みなやり方ではありません…
それは自動ジャズの喧騒
窒息させられた者たちの、断末魔の声、

[24] ただし、コヴネル自体はあくまでそれを直感していたにすぎないとされる。そのことをふくめてヴィルノについてはウォルター・ラカー編、前掲書、87-89 頁、参照。

絞首台をぜひご覧ください
見てください、柱の一本一本を見てください
10 人ずつ！　10 人ずつ！　10 人ずつ！
彼らは[吊り下げました]

ここでカツェネルソンは、射殺、ガス殺、絞殺と、ナチによる殺害方法を列挙している。殺戮され、石灰を被せられた死体の山から子どものすすり泣く声が聞こえるという戦慄的なイメージ[25]と、きっちり 10 人ずつを絞首台に吊るすという偏執的なイメージ。そのあいだで、ヘウムノの「ガス」が「巧みなやり方」と皮肉に呼ばれている。ここでヘウムノの名前はむしろ目立たないとさえ言えるが、これがホロコースト文学のなかでガス殺に言及した最初の作品のひとつであることは、疑いないところだろう。

しかし、この作品が書かれた時点で、ルブリン・ゲットー一掃の知らせはまだワルシャワには届いていなかった。1942 年 4 月の終わりにそれが確実な知らせとして到達するとともに、カツェネルソンの作品は明確に「ユダヤ民族にたいする絶滅としてのホロコースト」を主題とすることになる。以下は、[1942 年]5 月 31 日の日付が末尾に書き込まれた、37 連からなる長篇詩「災いあれ」の冒頭 5 連である。

災いあれ、お前は私の子どもたち全ての息絶える声を聞いた
私の年寄りたち全ての声、古くからの私の民の息絶える声を！
殺人者の民族よ、知るがいい、子どもたちは見失われない
年寄りは時期尚早に死んだりしない。

災いあれ、お前は平安に暮らしていた私の民をすっかり空っぽにした
そして私の祈りの家を、私の古いシナゴーグを
ユダヤ人と一緒に燃え上がらせた
それに、私の聖なる町、ユダヤ人の町を。

災いあれ、お前は民を、武装していない民を絶滅させ[た]

---

[25] このイメージは『滅ぼされたユダヤの民の歌』にまで引きつがれてゆくが、『ヴィッテル日記』の 1943 年 8 月 20 日の項目でカツェネルソンはヴィルノでの大量殺戮の情報が伝わった当時のことをこう書いている。「〈守衛たち〉〔青年運動のメンバーたち〕が悪夢の旅から戻ってきて、私たちにヴィルナでの出来事を報告してくれた。奴らは人々をヴィルナ近郊のポナリに引きずっていき、墓のなか、深い壕のなかに入れた。すぐに奴らは射撃をはじめ、断末魔の苦しみにある人々に石灰を被せた。この死体の層のうえにつぎの千人が追いやられた。こうやって、奴らはこれらの殉教者たちを殺戮したのだ」（Katzenelson, Yitzhak, *Vittel Diary*, trans. by　MyerCohen,Hakibbutz Hameuchad Publishing House 1974, p. 148）。ここからすると、「石灰を被せられた死者たち」というイメージの根底にあるのは、カツェネルソンにとってはポナリの森の虐殺かもしれない。

まったく無防備な民を絶滅[させた！]
知るがいい、まったく無防備な民は、お前を激しく[罰するだろう]
お前は、武装していない民のゆえに、裁きの場に引き[出されるだろう]

[災い]あれ、子ども殺しの民族、[年寄り殺しの民族よ]
お前は私の子どもたち[と]私の[年寄りたちを殺戮した、]
知るがいい、殺された老人は大人しく身を隠したりしない
子どもたちは、母親の胎内から現われるように、墓から敢然と身を起こす。

知るがいい、知るがいい、ユダヤ人は空しく死ぬことも殺戮されることもない
一つの民族が理由なく絶滅させられたりしない……
知るがいい、殺戮の民族よ、エルサレムは荒れ野にされたりはしない――
撃て、撃て、私の心臓を……それがお前の最後の弾丸だ！

ここでカツェネルソンの作品はユダヤ民族の「絶滅」という事態をはっきりと照準に入れ、前作にもまして強い怒りを爆発させている。この作品の主題設定は、トレブリンカへの「移送」の開始に先立って、すでに『滅ぼされたユダヤの民の歌』にまでまっすぐに通じている。しかも、4 行 1 連で、その各行が比較的長いというテクストの形態も、『滅ぼされたユダヤの民の歌』を先取りしている印象がある。原文では各行の終わりで、第 2 行と第 4 行が脚韻を踏んでいるが、これも『滅ぼされたユダヤの民の歌』において第 1 行と第 3 行、第 2 行と第 4 行が交差脚韻を踏む形になる、その過渡的な形態と見なすことができる。

そして、上の引用で「私の聖なる町」「ユダヤ人の町」と呼ばれているものの代表がルブリンである（原文は複数形）。ルブリンには 1941 年 4 月にゲットーが設立されていたが、それが 1942 年 3 月から 4 月にかけていち早く解体されるのである。ユダヤ人の多くはルブリン近郊のマイダネク絶滅収容所（強制労働収容所をも兼ねていた）もしくはベウジェッツ絶滅収容所で殺戮される。ルブリンは古いシナゴーグをもつ古くからのユダヤ人の町であり、しかもワルシャワから列車で数時間の都市である。ヘウムノ、ヴィルノにおける大量殺戮のニュースにも増して、ルブリン・ゲットー壊滅の知らせは、文字どおりワルシャワ・ゲットーを震撼させた。ハイム・Ａ・カプラン『ワルシャワ・ゲットー日記』には、1942 年 4 月 7 日の日付でこう書かれている。

ユダヤ人のルブリン、学問と敬虔な信仰心に溢れた学者と作家の市は、跡形もなく破壊されてしまった。4 万 4000 のユダヤ人から成る共同体は、すべて根こそぎ引き抜かれ、殺害され、消滅させられてしまった。共同体の建物、シナゴーグ、聖書研究の家〔ベイトーミドラシ〕は地上から一掃されてしま

った。[26]

ルブリンのユダヤ人共同体の壊滅はもちろんカツェネルソンにも大きなショックを与えた。彼はルブリンのユダヤ人共同体の壊滅を、この作品から間もなく書き起こされる「ラジンのレベの歌」において主題化し、その作品においては、レベが列車のなかに放置されたルブリンのユダヤ人の死体を埋葬する場面（それ自体はいささか非現実的である）が重要なモティーフとなる[27]。それにたいしてこの作品では、カツェネルソンはルブリン共同体の壊滅に焦点をあてるよりも、それをもたらした「ドイツ人」にたいする自らの怒りを鮮明に書き記す。以下は「災いあれ」の第14連から第17連にかけてである。

探せ、殺人者よ、お前たちの故郷を、お前たちには見つけることができない……
われわれのようにこの地上をあてどなく彷徨い、そして探せ
廃墟の上を探しながら――気が狂うがよい、
そして、お前たち自身の狂気の中で、呪われるがいい！

逃げろ！　争いのあとの敗者よ、さあ、ネズミのように逃げろ、
どこへ逃げるのかも分からないまま、そうすれば、お前たち殺人者を
道の樹木が呪うだろう、草の葉っぱが呪うだろう
あらゆる池の岸辺で、すべてのカエルがお前たちを呪うだろう。

逃げろ、すべてのドイツ人よ、殺したユダヤ人一人をぶら下げて、
われわれは、お前たちの首に、黙ってしがみついているぞ、
われわれはお前たちの首を絞めてやる、だが窒息させはしない――
首をひねって、さあ、見回してみろ……

そこにいるぞ[われわれが]……われわれが、われわれが！
そしてこれがわれわれの爪だ、死んだあとも、爪は鋭く伸びている、
お前たちはあらゆる道でわれわれを殺戮した
[それであらゆる石]はわれ[われの血]で赤く染まっている。

この作品「災いあれ」はワルシャワ・ゲットーでは「呪い」というタイトルで知られていたとされるが、それこそ「ドイツ人」を呪い殺すかのような呪詛の言葉が

---

[26] ハイム・A・カプラン、前掲書、128頁。〔　〕表記も訳文のまま。ただし、4月7日という日付は訳者が記しているとおり、前後の記事からして、4月17日などの誤記・誤植かもしれない。実際、ラウル・ヒルバーグはルブリン・ゲットーの解体を1942年4月17日から20日にかけて、と記している。これについては、ラウル・ヒルバーグ『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』上巻、望月幸男ほか訳、柏書房、1997年、370頁、参照。

[27] 細見和之、前掲論文、82-85頁、参照。

記されている。殺したユダヤ人ひとりずつにしがみつかれた状態で故郷をめざさなければならない「ドイツ人」たちの姿――。これに続く連で、カツェネルソンはしかし、故郷でその「ドイツ人」たちの家は荒れ果て、妻も子も死に絶えている、と記している。さらにカツェネルソンは「ドイツ人」を「ハイエナ民族」と呼び、激しい言葉を刻みつけている。以下は第 29 連から第 33 連にかけてである。

お前たちは、死体を玩ぶように、われわれで快楽を満たした
お前たち、ハイエナ民族は、われわれの血を飲み干した
お前たちを助けたのは誰だ……神か？　それとも悪魔か？
もしも神なら――きっとおいしく感じたことだろう！

もしもそれが悪魔なら……いっさいは呪われよ、
神によって、人間によって、呪われよ、お前、野性の獣よ！
メフィストフェーレスとともに大地の奥深くに沈みこみ、
大地の深みで休みなく動き回っているがいい……

大地は、大いなる怒りと大いなる憎しみに駆られて
吐き気とともにお前たちをその口から吐瀉するに違いない――
お前たちは死者として通りを彷徨うことになる、[われ]われのように
われわれのように、妻と子を連れた一団となって。

すると、お前たちの姉妹であるハイエナ[が]
お前たちの体から、最後の毒の一滴をすする[だろう、]
ハゲタカがお前たちの眼球を突っ[つ]き
お前たちのどす黒い悪しき心臓を、深く抉り取る[だろう]……

喰らい尽くされた心臓で、お前たちは動き回ることになる、
零れ落ちた眼球でお前たちは見ることになる、
あたりが明るいのか、暗いのか――
どこから？　どこへ？　どうなっているのか？　いまは何時か？と

カツェネルソンは、トレブリンカへの「移送」がはじまるまでのあいだ、さらには「移送」のただなかにおいても、この作品をたえず携えていて、ゲットーで友人たちを前にして、何度も朗読したようだ。彼がフランスのヴィッテル収容所においてヘブライ語で書いた『ヴィッテルの記録』（英訳タイトル「ヴィッテル日記」）には、繰り返しこの作品について触れた記述が見られる。たとえば、ワルシャワの代表的知識人で、あの「ドナドナ」の作詞者アーロン・ツァイトリンの父親でもあったヒレル・ツァイトリンを前にして朗読したときのことを、カツェネルソンはこう綴っている。カツェネルソンにとってこの作品がどれだけ重要だったかを確認する意味でも少々長く引用しておきたい。

私はポケットから巻き紙を取り出した。それは紙に書き付けた呪詛だった。私はそれを、ハナと子どもたち、二人の子どもたちが私と一緒にいたときに書いたのだった。その呪詛は薄い紙に小さな文字でびっしりと書き込まれていた。それは、人間のなかの屑どもがルブリンの偉大で神聖なユダヤ人共同体を壊滅させたあとで、あらゆる民族のなかでもっとも悪しきこの民族を私が呪って綴った呪いだった。最後の一人にいたるまで彼らはルブリンのユダヤ人を絶滅させた。この呪いを、ヒレル・ツァイトリン――彼の思い出よ、祝福されてあれ――も、彼らがワルシャワのユダヤ人を殺戮しはじめる前に聞いていた。その 2 年前、私たちが一緒に暮らしていたとき――そのとき、私は家族とともに暮らしていた。いまは家族はおらず、私と一人の息子だけだ――私たちは、一つのアパートにツァイトリンとともに住んでいた。ある早朝、私が台所を通っていったとき、彼が立って祈っているのに出くわした。彼は顔を窓のほうに向けていたので、私には気づかなかった。私はその祈りのなかで彼がイディッシュ語でヒトラーと彼の民族を激しく呪い、こう結ぶのを耳にした。「この世界の主よ、災いを！」……私は驚きで震えていた。そして 2 年後に私が彼の前で、イスラエルの民の絶滅の前夜に、私の呪いを読むことになったのである。それは 2 年前にヒレル氏が始めながら、その時点では全体を終えることができなかったものだ。「この世界の主よ、災いを！」に的確な表現を彼は与えることができなかった。2 年後、その呪いは私のなかで機が熟した。私はその呪いを紙に書き上げ、それを彼に読んで聞かせたのだ。[28]

この一節からすると、「災いあれ」はこれがツァイトリンの面前で朗読される 2 年前にツァイトリンがひそかに発していた「呪い」に一篇の詩の形態を与えたもの、ということになる。カツェネルソンはのちに『滅ぼされたユダヤの民の歌』第 13 の歌で、ツァイトリンが礼拝の際の肩衣タリートをまとってウムシュラークへ引きずられ、その場で射殺される姿を描くことになる[29]。

4．ユダヤ的英雄を讃えて

カツェネルソンは「ドイツ人」にたいする激烈な怒りを書き付けたこの 2 作のあと、武装闘争による抵抗とはべつのユダヤ的英雄の姿を描く。それが「シュロモー・ジェリホプスキの歌」である。1 連 4 行を 37 連重ねるとともに、あいだにヘブライ語での「エルサレムの歌」とそのイディッシュ語訳を挿入した、長篇詩である。このテクストの形態は、やはり前作の「災いあれ」から『滅ぼされたユダヤの民の歌』へと引きつがれてゆくものである（不完全ながら、各連の第 2 行と第 4 行で脚韻が踏まれている）。

---

[28] Katzenelson, *op. cit*., pp. 246-247.

[29] カツェネルソン『滅ぼされたユダヤの民の歌』前掲、77 頁、参照。

シャブオットの祭（収穫祭）の前夜、ウーチのすこし西に位置しているズドゥンスカヴォラで、「ドイツ人」によって 10 人のユダヤ人が見せしめの形で絞首刑にされた。そのうちのひとりがシュロモー・ジェルホプスキである。当時 37 歳前後だった彼は、敬虔なハシッド派の家系に属していて、商業に従事するとともに、音楽の愛好家だった。彼はその処刑に際して、シャブオットの祭がシナイ山でトーラーが与えられた日の記念祭でもあることをまわりの仲間に想起させ、そのようなかけがえのない日に殉教できることをひとつの特権とすべきだと語りかけ、エルサレムの歌を歌い、喜びに満ちた姿で死んでいったとされる。

シェイントゥフによると、この処刑のニュースは、ドロールの地下出版の情報紙に 1942 年 6 月 9 日付の記事で掲載されていたという[30]。カツェネルソンはそのニュースにくわえて、ゲットー内のハシッド派の知人をつうじて得た情報も盛り込んで、この作品を書き上げたようだ。この作品に日付の記載はないが、以上のことから 1942 年 6 月 9 日以降ほどなくして作られたものと推測されている[31]。カツェネルソンはこの歌を以下のように力強く、また格調高く歌い出している。

> [歌]え、大地と空よ、歌え、神よ、歌え、その「聖なる名」の者よ、
> 歌え、この地にある全てのものよ、歌え、かの地の全てのものよ、歌え、天上のものよ！
> 歌え、全ての人々よ、歌え、シュロモー・ジェルホプスキの名を—
> 彼は、この地上における人間を、人間を、高めたのだ。
>
> ホメロスよ、立て、お前、盲目にして偉大なる歌人よ、
> そして、ダビデ、ダビデ、エッサイの息子、——彼も立ち上がるべきだ！
> 竪琴を摑み取り、その高貴な指先で弦をかき鳴らし
> さあ、歌え、シュロモーの歌、あのズドゥンスカヴォラのユダヤ人の歌を。
>
> 歌え、そして慰めよ、大地を……慰めよ、慰めよ、貶められた大地を、そして目覚めさせよ
> 「元気を出せ、さあ、大地よ、新たに力を蓄えて、もう一度寛大さを示してくれ」と
> 誰がヘラクレス、アキレスと呼ばれよう、誰がヘクトルと呼ばれよう？
> ズドゥンスカヴォラの市場で縊り殺された、あの英雄と比べるなら？

1 行目の「『聖なる名』の者」とは神にたいする婉曲語法だが、この「歌え」という呼びかけはそのまま『滅ぼされたユダヤの民の歌』の冒頭に引きつがれてゆくも

---

[30] KATZENELSON, *op. cit*., pp. 640-641.

[31] *Ibib*., p640.

のだ。ただし、『滅ぼされたユダヤの民の歌』ではもはや神への直接的な呼びかけではなく、自分自身への呼びかけとなり、しかも容易には歌い出せないという苦しさが反復される。それにたいしてここでは、ホメロス、ダビデ、さらには古代ギリシアの英雄たちが引き合いに出されて、力強く歌い出されている。

それにしても、いったいズドゥンスカヴォラでなにがあったのか、そして、ジェルホプスキはそこでどのような状況に置かれていたのか、カツェネルソンは続く第4連から第7連でじつに明晰に綴っている。

> ズドゥンスカヴォラでのことだ、騒ぎがあり、小競り合いがあり、騒動が巻き起こった
> シャブオットのイヴ――シナイ山でトーラーが授けられた日だから、当然のことだ
> 閉鎖されたゲットーの至る所が大きく開かれた
> けれど、祝祭の準備に励んでいるのは、ドイツ人たちだけだ
>
> 彼らはゲットーのいくつもの門を、広々と開き、開け放った――
> きょうはゲットーに立ち入ってもかまわない、狭くて、汚れたゲットーに
> そこに足を踏み入れて、見渡せば、誰の目にも飛び込んでくる
> ちょうど市場のところ、もう準備万端整えてそびえ立つ、10台の絞首台の姿が
>
> ドイツ人たちは、町の閉鎖区域にも、自由に立ち入っている
> 奴らはユダヤ人たちを、力づくで住居から市場へと駆り立てる
> 「さあ、見ろ」と……シーッ！　奴らはもう彼らを連れている、[紙を]見て読み上げる
> 10人のユダヤ人、選び出され、印を付けられ、集められた10人のユダヤ人の名前を[。]
>
> シュロモー・ジェルホプスキ！……その名前が響き渡り、エコーが空中にこだました
> 近くのユダヤ人、遠くのユダヤ人の耳のなかで、その名前が反響した
> すると10人の中の一人が頭を高々と掲げた、まるで屋根の煙突のように――
> 「見ろ、あいつだな！　お前たちはあいつを別の人間と置き換えることはもうできないぞ！」

ゲットーでの空腹、冬の寒さを歌っていた作品、あるいは「ドイツ人」にたいする怒りを爆発させていた作品と比べると、カツェネルソンはここで書くべきことの核心に到達している印象がある。それはいわばユダヤ的な英雄の叙事詩である。絞首台をいそいそと設置し、ユダヤ人を「見物」に駆り立てる「ドイツ人」たちと、そのなかでひとり泰然自若としているジェルホプスキ。カツェネルソンは続く連で、処刑を目前にして、絞首台の足場にいながらまるでシナゴーグの祈りの台ビーマーに足を置いているかのジェルホプスキの姿を描いている。ジェルホプスキが朗々と

した声で祈りの歌を歌う。すると、彼の声にあわせてユダヤ人の共同体全体が歌っているかのようだったと記されている。

しかし、ジェルホプスキは自分を取り巻いている聴衆がじつは歌っていないことに気づく。聴衆どころか、同時に処刑される他の 9 人も歌ってはいない。ジェルホプスキは処刑される仲間に怒りの声で呼びかける。以下は第 13 連から第 15 連である。

「なぜだ、なぜ君たちは、頭を重く垂れているのだ[？]
なぜ君たちはそんなに打ち沈んで、その場にうずくまっているのだ？
元気を出せ、信仰心をもって元気を出せ、いまこそ元気を出さねばならない！
ユダヤ人が君たちをつうじてさらに悲しみに追いやれることなど、あってはならない！

「ユダヤ人たちよ、シャブオットのイヴだぞ！　あすにはシナイ山で与えられるのだ、
私たちの懐かしい、喜びに満ちた、聖なる書、トーラーが
生き延びることができないわれわれだって、他の全ての者たち以上に
憂鬱になってはならない、きょうは憂鬱になってはならないのだ

「さあ、喜ぼう！　こんなふうに死んでゆくことは、ユダヤ人の誇りだ！
幸いなわれわれ！　われわれはユダヤ人全体のために死ぬのだ、殉教するのだ、われわれは！
絞首台で吊り下げられるのは、われわれの大いなる特権ではないか
さあ、歌おう、ユダヤ人たちよ、一つの歌を一緒に歌おう」

こう呼びかけて、ジェルホプスキは「エルサレムの歌」をヘブライ語で歌う。市場の全体がその歌に耳を傾けている。すると「金髪の野獣」がやって来て、ジェルホプスキに平手打ちを食わせる。それでも彼はかまわず歌い続ける。カツェネルソンはその歌声のなかで、執拗に存在していたシオニストとブンドの対立も止揚されてゆくかのように記述している。しかし、処刑者たちは仕事を諦めたり放棄したりはしない。その歌声のなかで処刑の準備が進められてゆく。以下はこの作品の第 26 連から第 30 連までである。

そのうちに、処刑執行人がこっそりとロープを手繰り寄せ、
黙ってそれを彼らの首に投げかける――
温かい 10 の首、見開かれた 10 組の目、憧れと恐れで満ちた 10 の心臓
その傍らには、固く釘で打たれた 10 本の柱、石でできた 10 の錘。

彼らは準備を整え、飛ぶ前の鷲のように決意を固め、飛び立つ用意をしている、
そして、信頼と愛をこめて、シュロモー・ジェルホプスキにその眼差しを向けてい

る――
すると、シュロモー・ジェルホブスキは、彼ら全員に、高らかにこう言葉を発した。
「今日はシャブオットのイヴだ、ユダヤ人たちよ、さあ、私と一緒にダンスを踊ろう！

さあ、死を前にしたいまこの場で、踊りの準備をしようではないか！
われわれは幸いだ、われわれには好都合ではないか、ここ、市場の真ん中ならば
イスラエルの民全体、そのまっ[たき全体］を前にして、自らを犠牲に捧げること
われわれの肉体は魂を求めるように、その犠牲を求めている――さあ、ユ［ダヤ人］たちよ、踊ろ[う！]

そして、彼は両手を差し出し、頭をひょいと下げ、肩をすっと[持ち上げた]
すると、9 人の殉教者仲間は、彼とともに、[瞳を]輝かせる――
その瞬間、あのドイツ人、荒々しい怒りに駆られたドイツ人が駆け寄って、
彼らの首にかけられたロープを強く引っ張った。

歌え、大地と空よ、歌え！　神よ、歌え、その「聖なる名」の者よ
歌え、この地にある全てのものよ、歌え、かの地の全てのものよ、歌え、天上のものよ――
歌え、全ての人々よ、歌え、シュロモー・ジェルホプスキの名を
彼は、この地上における人間を、人間を、高めたのだ！

絞首台でいよいよ首に縄をかけられた状態で、イディッシュ舞踊のダンスを踊ろうとまで呼びかけ、その最初の仕草をしてみせていたジェルホプスキ――。そして、その瞬間に、そのままあえなく縊り殺されたジェルホプスキ―。そこにカツェネルソンがユダヤ的英雄の真髄を見ていたことは疑いない。この歌の末尾でカツェネルソンはジェルホプスキの体現していた英雄性を、徹底した非暴力の観点で讃えている。以下はこの作品の最後の 4 連である。

太陽よ、星よ、世界の隅々で歌え
その輝きで、安らかに、歌え
彼のことを歌え、彼を讃えよ、あの英雄の中の英雄を、
彼のことを歌え、あのユダヤ人の中のユダヤ人を！

歌え、彼はこの地上で、誰一人虐殺することも、
誰一人射殺することも、決してなかったが、
歌え、彼は決して殺人者ではなく
一度も敵の血を流させることはなかったが。

彼はどの都市もどの村も、破壊などしなかった
爆撃機で空を飛んだりしなかった
路上の人間に爆弾を投下することもなかった
剣をその鞘から引き抜くこともしなかった[。]

歌え、彼を、貧しいシュテートル、
狭く、細い道からなるシュテートルの、あの英雄を
歌え、彼を、讃えよ、彼を、そこに彼がいる、見よ、見よ、彼を、
[ズドゥンスカヴォラの、あの聖なる男を。]

シェイントゥフは、このようなカツェネルソンの主張がこの作品をドロールのメンバーたちを前にして朗読された際に、論議を呼んだことについて触れている[32]。当時、ドロールのメンバーたちは、いよいよ武装闘争にむけた準備にかかろうとしていた矢先だったからである。カツェネルソンのジェルホプスキの英雄性にたいする讃歌は、そのことに水を差すものとも見なされえたからだ。一方でカツェネルソンがいわゆる非暴力主義者では必ずしもなかったことは強調されねばならない。事実彼は、1943 年の 1 月蜂起に、ドロールのメンバーたちとともに参加して、ドイツ人と武器をもって戦うことの意義を強調している[33]。

とはいえ、ジェルホプスキのような態度が、ヴィルノのゲットーでアバ・コヴネルが発した「ユダヤ人よ！　羊のように殺されに行くな！」という呼びかけと単純に相容れない関係にあるのでもないことも確認されねばならない。平たく言うと、カツェネルソンにとっては、武装闘争もまた、ジェルホプスキの体現していたような精神的な英雄性を根底に保持しているものであったと考えることができるのだ。実際ゲットーにおける武装闘争は、戦術的な有効性などという次元を遥かに超えた、ぎりぎりの精神的な態度選択であったのだ。この意味において、カツェネルソンの創作のなかでこの「シュロモー・ジェルホプスキの歌」から「ラジンのレベの歌」へと引きつがれてゆく逆説的な「ユダヤ的英雄」のラインはやはり重要である。そして、このぎりぎりのラインこそは、現在のイスラエルにおいて、ワルシャワ・ゲットーでの武装抵抗の記憶から決定的に欠落しているものではないかということは、繰り返し問われねばならない。

おわりに

---

[32] *Ibid*., pp. 641-642.

[33] これについては、『滅ぼされたユダヤの民の歌』第 13 の歌と第 14 の歌を参照。さらに、ツィヴィア・ルベトキンが記している 1 月蜂起に際してのカツェネルソンのつぎの言葉をも参照。「われわれが武器を手にして、敵に直面し、必要ならば死ぬ覚悟ができていることを、われわれは幸福に思うべきだ。われわれの武装闘争は未来の何世代にもインスピレーションを与えることだろう」――Lubetkin, Zivia, *In the Days of Destruction and Revolt*, trans. by Ishai Tubbin, Hakibbutz Hameuchad Publishing House 19781, p. 151.

最後に、ゲットーの日常のひとこまを印象深く定着させた「そのユダヤ人は笑った」を確認しておきたい。カツェンルソンがゲットーの通りで目撃した出来事を記した作品で、1942 年 6 月終わりから 7 月のはじめにかけて書いたと推測されているものである[34]。現存の形で 11 のパートからなるやはり長篇詩である。本来さらに長大な作品だったと考えられているが、末尾は原稿が散逸し、断片的に終わっている。ただし、この作品については全訳をすでに発表しているので、これまでのように長く引用するのではなく、主として内容を簡単に紹介することにする[35]。

ゲットーのある通り（おそらくカリメリツカ通り）でドイツ人の「航空兵」が瀕死の状態で歩いていたユダヤ人を突き飛ばす。そのユダヤ人は仰向けに倒れこみ、そのまま死んでいったように思われる。すると、そのドイツ兵は通りを歩いていた別のユダヤ人を呼びとめ、その死体の腹のうえに足をのせるように言う。そのドイツ人はバッグからコダックのカメラを取り出すが、ユダヤ人に煙草をくわえさせることを思いつき、そのユダヤ人が死んだユダヤ人の腹にのせて煙草をぷかぷかやっている状態で撮影しようとする。そのときドイツ人から「笑え！」と命じられて、そのユダヤ人は笑う。しかし、撮影が終わって、ドイツ人が立ち去っても、そのユダヤ人は相変わらず笑ったままである。笑顔が顔に貼りついたままの状態で、そのユダヤ人はワルシャワ・ゲットーの通りを彷徨い、さらにゲットーの壁を越えて、ポーランドの各地に出没する……。

後半は不思議に幻想的な雰囲気に変化するとともに、末尾が断片的に終わっているため、全体としてどのような作品であったのか、分からない。しかし、笑顔を貼り付けたまま彷徨っているそのユダヤ人の姿は、十分に戦慄的である。以下はこの作品の 10 のパートと 11 のパートである。

---

[34] その出来事についてカツェネルソン自身のちに『ヴィッテル日記』にこう記している。「……彼らの航空兵が通りでひとりのユダヤ人を殺した。その航空兵は、ユダヤ人のひとりに無理やり足をあげさせ、死体の腹に[載せさせ]、煙草を吸わせ、微笑ませた。そして、写真に収まるまでその微笑を続けさせた。彼がそのユダヤ人を撮影したのは、おそらく、かの殺人者シュトライヒャーの雑誌の一つに登場させるためだろう。航空兵はそのユダヤ人を写真に収めて、死体の前から手にしていた鞭で追い払った。そのユダヤ人が急いで死体から離れることも、笑いをやめることもしなかったからである。航空兵は[とうとう]そのユダヤ人を追い払ったが、その笑いはユダヤ人の顔から消え去らなかった。……一人の気違いの男と刺々しい笑い」(Katzenelson, *op. cit*, pp. 98-99)。

[35] イツハク・カツェネルソン「そのユダヤ人は笑った」細見和之訳、『ナマール』第 15 号、神戸・ユダヤ文化研究会、2010 年、63-72 頁。

10
彼は見てはいない、石の上を、骨の上を彼は駆けている、
まるで風に運ばれているかのように駆けている
彼の後ろを追いかけているのは惨めな骸骨、
そしてうめき声――それらは彼を追いかけている、追いかけている……

彼には聞こえないのか？　周囲のことはすべて目に入らないのか？
彼は鋼鉄と氷からできているのか？
いや、違う、彼は周りを見回さない証言者なのだ
彼は顔を見られたくないのだ、

彼の笑っている顔を……彼が殺したのではない――
それでは、なぜ彼はカインのように逃げるのか？
それは、苦しいときにも悲しいときにも発している笑い声のせいだ、
あの笑いから彼は逃げ出すことができないのだ。

彼はやって来ては、逃げてゆき、再び黙って姿を見せる、
[　　]それが彼の良心を妨げる、
[　　]どこであれ、[　　いたる]ところで
[　　]

[11]
彼はいまヴィルノから戻ったところだ……おお、恐怖の光景。
おお、身の毛のよだつテロルの光景――
彼はそこで目にしている、一つの都市のユダヤ人丸ごとが連れ去られる光景を、
彼らは二度と自宅に戻ることはないだろう。

この幸運を聞け！　君たちにはまだ一人ヴィルノの人間がいるのだ
一つの弾丸も用いず、のちに

……

さきに記したとおり、この作品はここで原稿が散逸してしまっている。オリジナル草稿は1942年7月20日にジェルナ通り34番地に埋められていた書類から戦後発掘されたものだが、現存しているその草稿は破損がひどく、10のパートの終わりでもシェイントゥフの復元できなかった箇所が多く見られる。この作品は、「災いあれ」、「シュロモー・ジェルホブスキ」とともに、「怒りの歌」という本の一部としてドロールの地下出版で印刷の準備が進められていたという。このことは、ドロールのメンバーたちが「シュロモー・ジェルホプスキ」に描かれていたユダヤ的英雄性を否定していなかったことを示してもいるだろう。しかし、1942年7月22日にはじまる

トレブリンカへの「移送」によって、その計画も挫折したようだ[36]。ここからカツェネルソンのワルシャワ・ゲットーにおける「闘い」は、トレブリンカへの「移送」のただなかで、そして妻ハナとふたりの息子ベン - ツィオンとベンヤミンを失うという事態を越えて、継続されることになる。

How did Yitzhak Katzenelson "fight" in the Warsaw Ghetto? (2)

On his Yiddish Poems from April 1941 to July 1942

Kazuyuki Hosomi

Yitzhak Katzenelson wrote at least 8 poems in Yiddish in the Warsaw Ghetto between April 1941 and July 1942: "The Chronicle of Hershele's Death", "The Ball", "The Song of Hunger", "The Song of Coldness", "God, Pour out Thy Wraths…", "Curse", "The Song for Shlomo Zelichovsky", and "The Jew Laughed". During this period the population of the Warsaw Ghetto had reached its peak and its residents were dying one after another from starvation and endemic disease. After the outbreak of the German-Soviet war in June 1942, news about the mass murders in the Ukraine and Lithuania reached the Warsaw Ghetto. Reports about the liquidation of the Lublin Ghetto had also finally reached the Warsaw Ghetto by the end of April 1942. Through these channels, Katzenelson gradually became more aware of the Holocaust. In this paper I will try to lay out the development of this awareness through a chronological study of his poems. Finally, I aim to demonstrate how Katzenelson found his "Jewish hero" in Shlomo Zelichovsky, who died singing and dancing amid the terror of the Nazi regime.

(2011年1月10日受理)

[36] KATZENELSON, *op. cit.*, pp. 650-651.